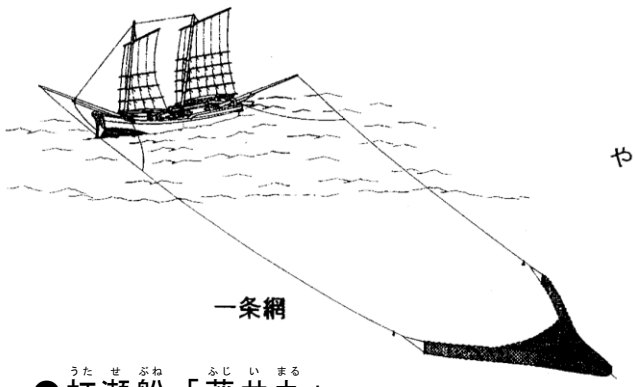
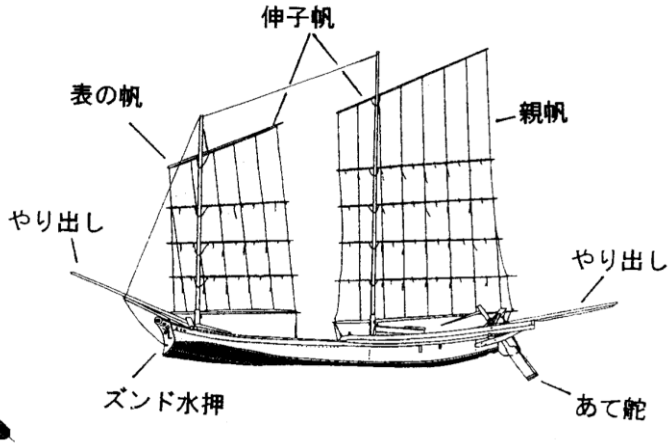
伊勢湾と打瀬船

海に恵まれた当地域では、古来から沿岸漁業が盛んであり、さまざまな漁法が営まれて、発達してきた。中でも、帆に風を打たせながら船を横流しにして網を引く打瀬網漁は、非常に効率のよいことから湾内に広く普及し、伊勢湾における漁業の主力となった。

はじめ伝統的な和船で操業していたが、明治中期に、西洋式帆船を参考に改良され、いわゆる「愛知県型打瀬船」の出現をみるに至った。やがて動力機が普及してその性能が向上すると、漁法も変化し、打瀬船も姿を消していった。

―打瀬船―





●**打瀬船「藤井丸」**
全長約１５ｍ、高さ約１２ｍ、肩幅約３ｍの愛知県型打瀬船。幡豆郡一色町の栄生漁港から寄贈を受けたもので、昭和３０年頃進水し、２０年近く活躍した。

●**いかり**…船をとどめておく道具。しまだ錨は、使わないときには場所をとらないよう笄を取り外した。

●**櫓・櫂**…船を動かす推進具。櫓は、櫓腕と櫓下の２材を継いだもので、押し引きして船を動かした。

●**もかぎ**…船上から物を引っ掛けたり、押したりするのに用いた。

●**伝馬船**…この地域の海岸は、遠浅であったので、大型船は沖合いに停泊していた。そのため、陸へ上がるための「はしけ」として、伝馬船を本船に備えて、行き来した。また、カニ釣りや貝・藻採取等に使用したり、海苔養殖が盛んになると、海苔摘みにも用いられた。この伝馬船は、市内の元船大工の手によって、平成９年に造られたものである。

―船上の生活―

この地域の漁業は、親子や夫婦などの家族単位で行う小規模なもので、ほとんどが半農半漁であった。操業範囲も伊勢湾内であり、漁に出る期間は日帰りか一昼夜程度であった。

船上の生活用具には、日常にも使用したものを主として、船のゆれにも耐えるように工夫したものが多い。

漁は、天候に左右されやすく、夜間に出漁することもあって、常に危険と隣り合わせであった。

●**水がめ**……真水を溜めておくもので、常滑焼のかめが多かった。

●**湯だる**……飲料水を入れて、船内に持ち込んだ水筒。

●**おひつ**……家から飯を入れて運んだり、船内での炊事にも使用した。
船が揺れても蓋がとれないよう、かぶせ蓋になっている。

●**手あぶり**…冬の船上で細かい作業をするときに指先を暖めた行火。

●**アカ取**……船底に溜まった海水（水アカという）をくみ取った。

●**つるべ**……綱をつけて海水をくみ上げるのに用いた。海面で桶が転倒し、水が入りやすくなっている。海水は、船上からまいて掃除に使った。

●**苫**……船上の雨よけに使用し、船や網などを風雨から守った。

●**あんびつ**…着替えや弁当など、ぬれてはこまるような物を入れた。

●**枕箱**……漁の小道具入れ。休憩時に枕がわりに使用したので、この名がある。

●**けんち枡**…漁獲物の計量に使用したもので、魚が傷まないように海水と一緒に入れた。海水は、底や側面の穴から抜け落ちるようになっている。

●**御守**……御守袋に入れ、身に付けた。

●**船磁石**……航海用の計器で船の進路を示し、船の進行方向を決めるうえで重要なものであった。船磁石には、正針と逆針とがあり、正針は子を北にして時計回りに目盛り、逆針は反時計回りに表示した。逆針は裏針とも呼び、あらかじめ船首を北に向け、針を表とあるところ（子）になるようにして固定することで、針の指す方角と船首の向いている方向とが常に一致するようになっている。

●**遠眼鏡**……航海用具の一つで、いわゆる望遠鏡。船の上から陸の目標物を見定めたり、陸から船が入港するときに自家の船を見分けるのに使用した。